



中央ウェイ

12月号

第58回全日本聾教育研究会 東京大会を終えて

指導教諭 山崎 亜矢

10月17日、18日の両日、都内ろう学校（大塚ろう学校・本校・葛飾ろう学校・立川学園）、国立オリンピック記念青少年総合センターを会場として第58回全日本聾教育研究大会が開かれました。本校は大塚ろう学校とともに主管校として研究の推進、研究会の運営に携わりました。私は研究部担当、指導教諭として研究に関わりました。本校の現状や生徒の様子に基づき、何を目指すべきか、教員間で話し合いながら、研究・実践を積み重ねてきました。本号では、研究の概要と研究の成果についてお伝えします。

第58回全日本聾教育研究会の研究テーマは「新しい時代の聴覚障害教育を考える～子供たちが豊かな人生を自ら切り拓くために～」でした。それを受けて、研究主題を「伝える、尋ねる、話し合う～他者と共に学び合い、思考を深める生徒の育成～」としました。本校は大学進学等を目指す中高一貫型のろう学校です。大学等へ進学できる確かな学力を身に付けさせることは教員の使命です。しかし、大学等への合格は人生の通過点であり、ゴールではありません。現代はVUCA（ブーカ）時代と言われています。先が見通せず、何が起こるか分からない世の中に生徒は巣立っていきます。確かな学力の他に、困難に直面しても、他者と話し合ったり、協力し合ったりすることで課題を解決する力、考えの異なる人とも互いが納得できる点を見出すなどの力を身に付けさせることが大切ではないかと考えました。学校生活の中で、最も長い時間を占めているのは授業です。日々の授業で「伝える、尋ねる、話し合う」活動を取り入れることで、これらの力を身に付けさせることができるのではないかと考えました。本研究では3年間にわたり中学部は筑波技術大学准教授 脇中起余子先生、高等部は東京学芸大学教授 澤隆史先生に御指導御助言をいただきました。両先生には各学部授業全体をご覧いただき、改善すべき点について具体的な御指導御助言をいただく他、研究の進め方についても御指導いただきました。

また、研究を進めるに当たり、研究体制を見直し整備しました。教科会において研究授業の協議を、年3回の校内研究会において研究主題に即した各教科会の目標の進捗状況及び成果と課題を報告しました。さらに中学部高等部に分かれて、指定授業者の授業づくりに全員が関わることを目的とした指定授業検討会を実施しました。これらを相互に関連付け、持続可能な研究体制づくりに努めました。10月17日の公開授業、指定授業には150名を超える参加者が来校し、2時間目に公開授業、3時間目に指定授業を行いました。参加された方からは、「丁寧な指導と生徒たちが学びに向かう真剣な姿が印象的でした。生徒たちが自分の意見を、自信をもって発信する姿が良かったです。」「考えるポイントを示し、生徒から考えを引き出しやすいよう工夫していた。」などの言葉をいただきました。

最後に忘れられない光景を書きます。ある授業を参観した時のことです。そこでは生徒が自分から疑問を持ち、友達に考えを尋ね、熱心に課題解決に向けて話し合う姿が見られました。私が驚いたのはこの後です。話し合いは、教室を出てからも続き、食堂でも続いていました。自ら学ぼうとする姿、他者の意見を受け止めた上で、もう一度自分の考えを深める学びの姿がそこにはありました。本校の教室、特別教室には「伝える、尋ねる、話し合う」とはどのようなことか、具体的に述べた用紙を掲示しています。研究会は終わりましたが、これからも「伝える、尋ねる、話し合う」ことを通して、一人一人の生徒が学びを深めていけるよう、授業力向上、授業改善に取り組んで参ります。